

〔研究ノート〕

為恭の画中自画像

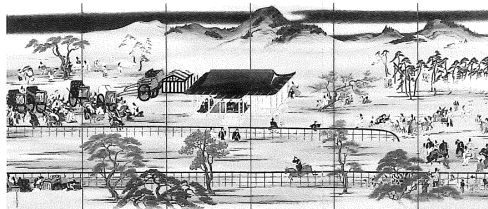
岡田為恭は幕末期に大和絵の復興を志した絵師です。大和絵の画題は土佐派とその分派の住吉派の絵師が専門的に描いていましたが、江戸時代の後期になると、土佐派の伝統を踏襲するだけではなく、古画を学んで大和絵を復興しようとする絵師たちが現れます。先鞭を付けたのは、土佐左光貞の門人であった田中訥言と弟子の浮田一蕙です。為恭は二人の後を受けて活躍しましたが、この二人には師事せずに、ほぼ独学で大和絵の古画の模写に努め、有職故実の知識を深めました。当時、十七才であった為恭が古画学習に励む様子が、小倉藩の国学者であった西田直養の随筆、『笈舎漫筆』第十卷十四条の「国画復興」の項に記されています。この記事には、「此人の見て腹にいれたる画卷左のごとし。」と記し、八十九種の作品を所蔵者とともに列記しています。為恭は若くして画才を世に認められ、その二年後の天保十二年(1841)には、一蕙らとならんで「春日権現験記絵巻」の模写に参加し、天保十四年には、木挽町狩野家の第九代当主、晴川院養信の依頼を受け、「年中行事絵巻」を制作しています。

為恭は大和絵の模写に努めただけでなく、近代的な感性をもって、多くの新しい大和絵の絵画表現を試みています。模絵や屏風絵などの大画面への展開もその一つです。大画面作品には絵師の力量が問われます。背景となる自然景や建物、人物、樹木、調度などの様々な図様を描き、最後には統一の取れた絵画空間にまとめねばなりません。「石清水臨時祭・年中行事騎射図屏風」(白鶴美術館蔵)は為恭の大画面作品を代表する作品です。六曲一双の本間屏風の左右の隻に、それぞれ祭礼の様子を描いています。落款の官位、「従五位下式部少丞」から安政五年(1858)、三十六才以降の作品とわかります。その前年の九月に、徳川家の菩提寺である大樹寺の模絵、杉戸絵を完成させ、最も意欲的に制作していた時期です。右隻には「石清水臨時祭礼図」(図1)が描かれています。この祭礼は平将門・藤原純友乱の平定の報賽として天慶

五年(942)年に始められました。毎年、三月午の日に行われていたが、戦乱のため永享四年(1432)に中絶し、文化十年(1813)に光格天皇によって再興され、その後は、賀茂神社臨時祭と交互に隔年で行われました。光格天皇は数多くの朝廷儀礼を復興し、朝廷の権威を高めました。天保十二年(1841)十一月に崩御し、翌年の閏正月に諡号が再興され光格天皇と追諡されました。同年に為恭は「光格天皇策命使図巻」(東京国立博物館蔵)を制作し、この策命使の行列の様子を描いています。祭礼では、祭礼使が御所清涼殿で天皇から宴を賜った後、社頭に参向して舞殿の座について宣命を読み、十列の馬を牽いて舞殿を十周回ります。この時、殿上では駿河舞が行われます。描かれているのは、最後の馬を牽く場面です。冠に桜を挿し、美しい舞装束をまとう馬上の祭礼使の姿を大きく取り上げています。最も近景に当たるのは、鳥居のもとに集まる六騎の祭礼使です。上り坂の参道は鳥居の手前で大きく曲がり、鳥居を過ぎると、右上の舞殿まで真っ直ぐに伸びています。境内の景観は画面の遠近感を損なうことなく、自然にまとめられています。画面に生動感を与えているのは、祭礼使の乗る馬の表現です。桜や松の樹木でさえ、舞殿に向かう馬の動きに応じて靡いています。為恭はこの祭礼を実見していたと思われますが、現実の祭礼ではなく、古画から学んだ図様を典拠に、理想化された古の祭礼を描いているのでしょう。躍動する逞しい馬の描写には、為恭が敬慕する似せ絵の名手、藤原信実の作と伝えられる「隨身庭騎絵巻」(大倉集古館蔵)に通じる特色が認められます。

起伏のある山上の境内を背景に

図2



する右隻に対して、左隻は平坦な馬場で行われる「年中行事騎射図」(図2)です。この騎射(うまゆみ)は、殿舎の屋根に葺かれた菖蒲から、端午の節句の行事とわかります。端午とは、本来、月の初めの午の日という意味ですから、両隻ともに午の日に関係の深い行事です。描かれているのは、五月六日に一条大宮の右近の馬場で行われた右近衛の官人による真手結(まてつかい)の光景です。まるで飛ぶように疾駆する馬に乗り、弓を番える騎手の緊張した姿に人々の注目が集まっています。左隻の図様は従来から「年中行事絵巻」に典拠していることが指摘されています。「年中行事絵巻」は後白河法皇の依頼によって常磐光長が描いたと伝えられます。原本は六十巻を越える巻物でしたが、次第に散逸し、現在は住吉如慶らが写した模本が残されています。住吉家の十六巻の模本の内、彩色されているのは七巻だけで、「騎射巻」も彩色されていません。『笈舎漫筆』に記された八十九種の作品の中にも、「左右近衛騎射画」があり、所蔵者は「冷泉家」と記されています。当時、為恭は「冷泉三郎為恭」と名乗っていました。十七才であった為恭が既に所蔵していたとすれば、図様に精通していたことも理解できます。しかし、白描の巻物は極彩色の屏風にそのまま展開できません。彩色を加えるには、かなりの有職故実の知識が必要です。遠景の山々や近景の樹木を描き加

図3

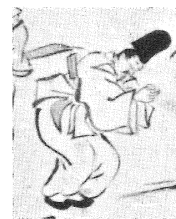


図4



図5



図1



えるなど、構図も改変しています。例えば、画面の左上に、老木の傍らで礼拝する鳥帽子、狩衣姿の男(図4)が描かれています。「年中行事絵巻」の「騎射巻」において、この人物(図3)が描かれるのは、騎射の場面ではなく、穩座の饗を終えた巻末です。「年中行事騎射図」では、敢えて、大幣を担ぐ男を先頭に歩む参詣途上の一行の後方に配し、顔をひねって少し正面に向けています。この礼拝する男の姿は「天照皇大神宮参拝図」(奈良県立美術館蔵・図5)を想起させます。

この作品には、為恭自身が二人の従者を連れて、天照大明神を祀る神社を参拝する姿を描いています。画中の為恭の満ち足りた安らかな表情は、「年中行事騎射図」の男と非常に似ています。落款に記された官位は「関白直廬預正六位下行式部少丞」です。関白直廬預となった安政三年(1856)以降ですが、いまだ正五位に昇進しておらず、「石清水臨時祭・年中行事騎射図屏風」以前の作品とわかります。

為恭にとって朝廷儀礼や神事を描くこと自体が、理想とする王朝世界の復興でした。為恭は「年中行事騎射図」の礼拝する男に自身の姿を重ね、画中の理想郷に浸っているように思えます。(中部義隆) ※図1、2、4、5は『復古大和絵師 為恭』(大和文華館 2005年)、図3は小松茂美編『日本絵巻大成 8・年中行事絵巻』(中央公論社 1977年)から複写いたしました。